

はじめに

本書は、高校と大学の接続、すなわち大学入試制度についての筆者の考察をまとめたものです。筆者が大阪府立高校の教員として初めて赴任したのは1978年です。その翌年の1979年度から共通一次試験が始まりました。したがって、教職歴のほとんどをマークシート式試験による入試制度と共に歩んだこととなります。

筆者は、日本地球惑星科学連合に所属して同連合の教育検討委員会の立ち上げに関与した縁で、日本学術会議の理学振興研究連絡委員会（2003年12月～2005年10月、委員長：江澤洋氏）の一員として、当時マスコミ等で喧伝された「理科離れ」をどう防ぐかについての議論に加わりました。さまざまな対策が検討される中で、筆者自身は、マークシート式試験による入試制度（当時はセンター試験と呼ばれた）がある以上、理科離れ問題の解決は難しいだろうと思い至りました。そこで、委員会の中で意見を一にする人たちを募って、2008年に、センター試験が教育に及ぼしている影響を論じた『検証 共通1次・センター試験』を監修し、出版しました。

その後、制度の見直しが検討されているのをニュースで見聞きして期待していましたが、初等・中等教育の改善に資

すると期待されていた項目がすべて破棄され、2021年度から「大学共通入学テスト」と名前を変えただけで、相変わらずのマークシートを用いた試験が実施されることになりました。何故、マークシート形式の入試から脱却できないのか。この問題を2020年10月ごろから2022年9月にかけて、いろいろな面から考えました。本書は、その考察の足跡を記録したものです。読者諸氏のご批判と、さらなるご考察を期待するものです。

高大接続と文章教育

目 次

はじめに	i
------	---

第 I 部 「高大接続」について

1 「高大接続」をめぐる議論の経緯	3
2 公正とは何か	6
3 論述問題とは何か	9
4 高大接続改革は何故頓挫したか	18
5 高校の定期考査の問題形式	26
6 高校と大学の乖離	33
7 思考力とは何か？	40
8 いろいろな思考力	46
9 基礎概念の教育の決定的な欠落	54
10 断章	59
11 大学の役割	64
12 「文章指導」はどこから？	69
13 文章教育に熱心な英国	74
14 英国流文章教育（5歳～8歳）	80
15 英国流文章教育（8歳～12歳）	85
16 英国流文章教育（13歳～15歳）	92
17 高校入試問題	102
18 高校教師の役割	107
19 記述式問題の導入は実現するか	125

20 大学一般選抜試験の記述式問題	133
21 再考「高大教育の乖離」	137
22 学習を楽しむとは—「終わり」にかえて—	143
注.....	147
参考文献.....	147
Web 参考文献	151

<p>第Ⅱ部 イギリスの「ナショナルカリキュラム」 と日本の「学習指導要領」 — 文章教育を主観点とする比較 —</p>

1 序	155
2 「序文」の比較	160
3 English と国語	168
4 キーステージ 2 以降の文章教育	182
5 学習指導要領の「見方・考え方」とは何か	189
6 ナショナルカリキュラムの「describe」	196
7 結び	201
注.....	205
参考文献.....	206